

若き司馬遼太郎と大阪

王 海

「国民的作家」と呼ばれた司馬遼太郎（1923-1996）は、関西大学とも縁の深い人物である。司馬は早くから故文学部教授谷沢永一氏、元学長河田悌一氏、法学部教授山野博史氏などと親交を結んだ。1989年に、本学100周年記念会館の落成を記念するため、国際シンポジウムが開催された。司馬はパネリストとして出席し、「芳香千里」という色紙を揮毫した。同色紙は本学の年史資料展示室に設置され、本学との親しい関係を語っている。



国際シンポジウムにおける司馬遼太郎（中央）
関西大学年史編纂室所蔵

幸運ながら筆者も司馬を研究している。筆者は博物館にある大阪都市遺産研究センターで勤務しているが、ここで大阪に関する行事を手伝っているうち、「日本」という視点だけでなく、「大阪」という、より具体的な環境で司馬を把握する必要性を感じるようになった。

大阪の文化を発信する文化人として、司馬はすでによく知られている。大阪育ちという要件はもとより、青年期のいくつかの経歴は、司馬が「大阪」を意識するきっかけとなった。本稿では学生時代・記者時代の司馬の大阪との関係を概述してみる。

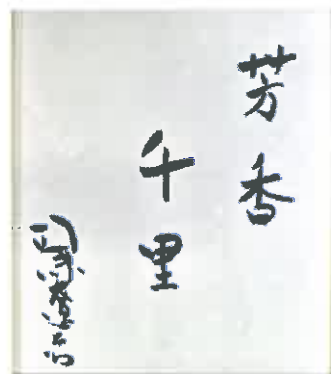
大阪育ち

司馬の自伝によれば、彼は父福田是定、母直枝の次男として生まれ、3歳まで奈良県北葛城郡で養育された。後に大阪市浪速区西神田町89

に移り、終戦まで20年間ぐらい住んだ。旧制上宮中学校の1年生の時に書いた作文（1936年12月）「物干臺に立って」では、稲荷小学校や高島屋、歌舞伎座が次々と姿を現してくる。大阪浪速区の町並みを描いたこの文章は、司馬の最も古い作品と言われる。

大阪で学生時代を送った司馬は、学校をあまり評価しなかった。試験勉強が得意でないため、受験に数度失敗し、大阪外国語学校に入学しても、専門的教育に馴染まなかった。そんな彼を魅了した場所は、浪速区にある新世界と南区にある市立御蔵跡図書館であった。内国勸業博覧会をきっかけとして繁盛を遂げた新世界では、通天閣を中心に遊園地や芝居小屋、映画館、動物園、飲食店などの娯楽施設が集中していた。このような新世界は、学校嫌いの司馬にとってまさに天国であった。当時の生活について、司馬は「九銭もにぎって新世界へゆけば、日曜日の朝から夜がふけるまで遊べた」と回想している。

新世界のほかに「生活の半分、精神的には半分以上」を占めるのは図書館であった。学徒出陣まで8年の間、司馬は授業をサボり、図書館に籠っていたという。その中に、大阪で発祥した立川文庫をはじめ、吉川英治の時代小説を満遍なく読んだ。猿飛佐助、霧隠才蔵、大石内蔵助、宮本武蔵など、司馬は時代小説や映画に登場した人物に心を惹きつけられた。学校よりも映画と時代小説。このように、司馬は大阪の大衆文化の中で学生時代を送ったのである。もちろん、その頃の生活は「非常時」によって厳しく規制されたのだが、市井生活が司馬の知識や人格的形成に大きく影響を与えたに違いない。



色紙「芳香千里」
関西大学年史編纂室所蔵

大阪離れ

時代小説と映画に耽る学生生活は、戦局の悪化によって途絶えた。1943年司馬は大阪外国語学校を仮卒業し、翌年学徒出陣のため満洲の四平陸軍戦車学校に行かされた。1945年本土決戦を迎え、司馬は釜山経由で新潟に輸送され、後に栃木県佐野市で終戦の報に接し、同年12月、空襲で焦土となった大阪に帰った。学生時代親しんだ新世界は壊滅、図書館も焼失し精華小学校に移転した。「将校服姿のまま大阪へ帰ってきたんですが、私にとって大阪は故郷の街だから、誰かに会いたくて、しかし焼跡になっていたので誰もおらず、結局図書館を探したんです。…しかし、図書館は4階に間借りしていて窮屈なので、すぐ出てしまいました」。司馬は当時の虚しい心境を振り返っている。

終戦直後の深刻な生活状況において、生きることがすべてであった。司馬が最初に働いたのは、今里の町工場で肩引きのついた荷車を引く仕事であった。ところが思う通りにならず、すぐやめてしまった。その後猪飼野の闇市で「一本の焼け電柱」に「幾日かの風雨に洗われ、墨も紙もおおかた剥落した」募集ビラを見つけ、その東5丁目8にある新世界新聞社に応募した。それが司馬の新聞記者の始まりであった。しかしわずか五ヶ月後、同僚の大竹照彦が上司と衝突したことが原因で、二人は辞表を叩きつけた。友人の紹介で、司馬は新たな職場を京都四条にある新日本新聞社に決めた。しかし当時新聞用紙の横流しが発覚し、新聞協会から用紙の配給が切れてしまった。その被害を受け、1948年に新日本新聞社は倒産した。三度目の新聞社は、京都市下京区にある大阪新聞社京都支局であった。入社翌年、妻とともに京都市左京区聖護院川原町に借家住まいを始めた。そこで、彼は5年間宗教を担当する記者として、京都の古刹で美術品や建築に関する記事を書き続けていた。以上の経緯から、終戦直後司馬は大阪を生活の拠点にし、直接大阪取材したのは、新世界新聞社での1年ぐらいかもしれない。実際に、京都へ引越した時点で、司馬の生活範囲は大阪からほぼ完全に離れたことになる。終戦直後生計を立てるため、転職を次々と余儀なくされた青年像が浮き彫りにされている。

「大阪離れ」といった生活状況は司馬の文章

にも反映されている。1952年まで、すなわち大阪本社転勤までの司馬の作品では、京都の寺を中心に京都の歴史や文化などを描くことが圧倒的に多く、大阪に関する文章は見られない。「大阪育ち」でありながら、1952年(29歳)までの司馬は大阪とほとんど接点なく暮らしていたと言えよう。

不本意であった大阪復帰

1952年7月に、大阪の交通の要衝、北区梅田27に産経会館(サンケイビル)が完成した。大阪新聞社と産経新聞社も入り、規模、高さ、設備においても、戦後大阪の復興を象徴する建物だと評価された。このような新聞社が拡大する時期に、司馬に人事異動の社命が回ってきたのである。「大阪本社地方部での地味な内勤仕事」のようで、しかも京都支局長の松村収に義理があるとして、司馬は転勤に難色を示した。だがこの不本意な異動も結果的に、大阪の知識人と交流を深め、大阪を発信する代表的な作家になることに結びつくとは、司馬は想像もしなかっただろう。

その頃司馬の所属は産経新聞社に変わったが、彼が活躍したのは姉妹紙の『大阪新聞』であった。『産経新聞』は産業経済や家庭生活の記事を重視するため、文化欄は主流ではなかった。それに対して『大阪新聞』は地元紙で「大阪第一主義」を掲げ、文化欄を常設し、大阪ゆかりの知識人を多数招いていた。文化欄の編集者の一人として、司馬は企画や執筆依頼を通じて、石浜恒夫、藤沢恒夫、今東光、陳舜臣、梅棹忠夫などと親交を深めたのである。

のみならず、司馬自身も精力的に執筆活動をしていた。筆者はこれまでの調査を通して、司馬は50年代前半「風神」という筆名で計107点の記事(うち91点未収録)、60年代前半の「世相アラカルト」コラムにおいて、計33点の原稿(うち29点が未収録)を執筆したことを明らかにした。その中に、例えば「大阪文化」「大阪の郷土文学」「布施と十三」など、大阪に直接関係する文章が数多くある。仕事の関係で「大阪離れ」になった司馬は、大阪に転勤し『大阪新聞』という環境に取り囲まれながら、大阪への関心がようやく燃え始めたのである。